俳句

石垣　みち代

（波）

春一番修羅場と化して花時計
鳶描く五輪マークや椿東風
世界遺産にならずとも桜咲きつなぐ
青もみじ芭蕉稲荷の石蛙
木道のしめりほどよき草紅葉

井尻　浩彦

（千草会）

霞み退き耳成浮きて奈良盆地
三層の飛鳥の塔に春の雲
百済観音裳裾に春日編まねしや
思惟像の微笑微光よ春は闌け
香具山に衣干すべし夏近き

一色　千穂子

（波）

囀りの真只中を宮参り
ひとり居に朝寝咎める人もなく
自転車はわが良き相棒若葉風
入道雲真昼の村のがらんどう
寒林より光一閃目に刺さる

伊藤　成子

（天爲 湘南）

黄昏やひそと佗助茶室には
葉鶏頭あふるる赤や過疎の村
腰まげて日がな落穂を拾ひけり
白塗に紅さしいざや村芝居
かはたれや河鹿笛きく隠れ宿

伊藤就晤

（天爲湘南）

鉄橋の音帰省子目覚め県境
海風と陸風通ふ夏座敷
鶺鴒やシャッターチャンス五寸ずれ
藤沢は富士見える街秋夕焼
信号の明滅遠き冬田かな

伊藤美也子

（波）

青いゴムまり八月の落とし物
仁丹の匂ひと父と秋の風
まだ出来るスキップラ・ラ・ラ鰯雲
猫柳さやらさやらと雨はじく
玉子ひとつ落とす白粥寒明くる

犬丸由紀子

（湘南若葉会）

踏み鳴らすシテは雷神暑に荒ぶ
身をひけるワキの座暗し月の能
また一歩月光を踏む鬼女の舞
物の怪の未練身に沁む足拍子
切能の一管月に澄みきりぬ

今井美恵子

（波）

藤棚に風の出てきし文使ひ
物が持つ記憶てふこと走馬燈
流鏑馬の神事待つ馬秋高し
関八州冬帝陣をととのへし
羽織ぬぐ所作もめでたき寄席開き

岩崎照子

（季）

青空はほとけの心稲の花
曼珠沙華雨も炎となるほどに
ぐずる児にゐのころ草の子守唄
躓きて一詩目覚めよ大花野
冷まじや首を洗ひし井戸の闇

岩田遊泉

朝顔の昔偲ぶや川港
一瞥をくれて松茸見過ごしぬ
会釈されはてどなたやらサングラス
家人絶え鈴生るままの次郎柿
敬老の吾も余興の敬老会

江口文子

（天爲湘南）

二階から声飛び交ふや初日の出
正装の親子連れ立つ四月かな
観桜や人ひと人の乾門
島影と一緒に渡る交差点
菊人形ひいき役者と思ひたし

大久保啓子

囀の只中にゐてなほ寂し
かみ合はぬ二人の会話花曇
万緑へ球児の声の吸はれゆく
残り香にふと振り返る星の夜
灯火親しひとりの夜は尚更に

大　辻　あ　い

林檎ガブと噛むこと恐る八十路かな
秋うらら八十路の口紅ひかえめに
墓参り娘の愛犬も合流し
秋うらら少し遠くへ出かけたい
友と踊るスクエアダンス秋うらら

大　矢　あけみ

（はまべ句会）

裸子のつかみし空は大宇宙
転がりて蝉は無念の死を選ぶ
眠る猫茶畑の陽のさやさやと
洗面のボウル浄めて朝涼し
御輿渡御内なる神に導かれ

大　山　賢　太

（みちくさ・翡翠）

留守の間に貧乏葛蔓延りぬ
たまちゃんやこっちにおいでねこじゃらし
溢蚊や悪しき血を吸い千鳥足
秋の暮視界不良の眼の検査
病院にあかんべえする暮の秋

大　山　由　男

史上初ドーハのマラソン影踊る
木道の佳き顔交わす尾瀬の夏
号令も風となりけり水芭蕉
風抜ける露天風呂に竹葉舟
風渡り花を見る人口開けて

岡本　泉

（鷹）

焼鳥の串に火の付く西日かな
外つ国を見ず母逝きぬ金魚玉
ラムネ飲む少女の肘の白さかな
望郷にひらくアルバム日脚伸ぶ
近くまで来しとメールや水を打つ

岡本由貴

素麺にちりたる彩や昼の卓
雨上る街の明かりや夏燕
宿題の終らぬ人世薔薇真つ赤
ゆふぐれの鮭焼く匂ひ雨上る
バス停に秋草の風病癒ゆ

尾崎悦子

放生会金魚をつつく白き鷺
百日紅移る季節の並木道
熱き陽にススキ手を振る線路端
台風で涅槃入りした老銀杏
木犀の香りが揺れる軒の下

笠原与志生

（湘南若葉会）

磐梯を望み稲刈る日も間近か
曼珠沙華咲いて明治の用水路
信州に負けぬ会津の蕎麦を刈る
コスモスの咲いて駅舎の華やげる
とうとうと安積疎水や葛の花

加藤静子

（はこべ俳句会・波）

遺すものなき身は軽し散る櫻
咳をしても独りとなりし友案ず
星祭り空の何処かにゐる人と
寒月や振りむかぬまま手をふりぬ
黙といふ豊かなるもの寒夜かな

加藤英子

（一葦）

抽出しのハーモニカだす梅日和
ドローンでの土地の測量山笑ふ
新米の糠をつぎたし香の物
錫杖に十字の彫られ鵙日和
小走りのナース行き交ふ去年今年

金栗トモ子

（サンシャイン句会）

遠雷や骨にしみ入るベートーベン
三伏や音の狂いしオルゴール
爽やかに七十路の恋素手素顔
衣被病をひとつ剥ぐところ
裸木やこの身誇れど無一文

神谷章夫

（梓・季の会）

朴葉味噌ふつふつ飛騨の秋深む
機影過ぐ十一月の木洩れ日に
留守電の声の明るさ日脚伸ぶ
山国の肺活量に亀鳴けり
緑蔭を辿りそのまま森の中

亀倉　美知子

大太鼓いざ竜宮へ春告げむ
春ショール恙なき日々母にあり
天上の風渡るらむ舞妃蓮
動きだすからくり時計街薄暑
ユトリロの白き坂より秋の風

河村　青灯

（鷹）

駈け出せる子や初虹の消ゆるまで
茅葺きのまだ雫あり梅雨の月
窓ひらく程に秋気の部屋に充つ
秋蝶やいそがぬ人の前うしろ
傘すぼめ眉に名残の雪軽し

草柳　節子

（天爲湘南）

宿題の書初をして孫帰る
百日紅日暮に和太鼓響きけり
風邪の子の母に泣きつき釦剥ぐ
紅梅や枝々は空編み込めり
よく見れば旧草混じるいぬふぐり

草柳　得江

青空をかくしてさくらさくらかな
塗りたての百葉箱や芝青む
秋うらら自分のための無駄使い
ふるさとも遠くなりけり秋燕
目鼻なき仏ほほえむ赤のまま

久保田　恵　子

（鷹）

猪独活に揚羽来ている停車場
流れ藻を捉へ岩礁暑きかな
麦秋を見渡しゆける母の家
黒蟻の偵察らしき夜の門
常宿の緑濃き夜の手足かな

小松原　キイ子

（一葦）

折り紙の瓜坊足され賀状来る
合流の瀬音のやさし蓬摘む
花びらを分ける舳先や暮の春
ひとひらは髪の深きに花樗
柿挽ぐや届かぬ先は神のもの

小宮山　はるき

（みすず会）

ゆるゆると芝生墓地ゆく春田傘
木曽谷を越えて青筋揚羽かな
名馬逝く夏の終りの赤ワイン
職退いて十年今朝の摘菜汁
台風の町一夜裡に水没す

齋　藤　まり江

（波）

冬の駅LEDの星の海
母の忌や白き寒梅凛と咲く
春立ちて稜線染める朝日かな
日一日芽吹く静けさ清らかさ
陽光に木瓜咲き誇る寺の前

坂部ヨミ

佐渡ヶ島海は静かに柿数多
佐渡の海変らぬ松や真知子巻
意を決して乗るたらい舟秋の海
佐渡おけさ踊るも楽し秋の夜
秋晴れや旅は道づれ友増える

篠田清秋

犬と観る江の島からの初日の出
春風や耳をなびかせドッグラン（かわせみ）
初夏や地域デビューのパトロール犬
仮装した犬行列にハロウイン
クリスマス犬にも優しいプレゼント

篠原広子

橋上に風待つ人や茅舎の忌
やはらかく包む風呂敷柿の秋
うそ寒やカバンの底のチョコレート
燈火親し量子論読み始めたる
無造作に薪の積まれて冬用意

（六六俳遊会）

鈴木君子

杖を曳く姉妹と散歩やいわし雲
花冷や朝の茶粥のうまさかな
小包に郷の味わいわらびもち
八方の風に愛され秋ざくら
鰐口の房新しや祭笛

鈴木　操

（鷹）

一人居の家電に返事梅雨に入る
夏祭喧嘩別れの下駄の音
せせらぎは羊水の音田草取り
夕虹や不確かな世の己が影
秋海棠雲の流れの速きこと

栖原　由美子

（鷹）

老次のなまなかな意地ところてん
捕らはれの猪の人馴れあはれなり
菓子の名に女房詞月涼し
色変へぬ松より暮れし漁師小屋
山寺や深呼吸して霧匂ふ

高久　弘行

（天爲湘南）

緑青ふく二基の燈籠秋の雲
波を打つ土塀の裂けめ白芙蓉
台風禍銀杏の大樹ぶちきらる
台風の去つて本堂大法会
鵙猛る敵と御方の供養塔

武元　ひろ子

（五月会）

清明やひと日始まる電子音
暫くは伊勢路の車窓青田かな
うたたねに肩貸してをり冷房車
訪ね行く白蓮の碑や冬の瀧
熱燗や御国言葉の交じりけり

田中洋子

（未来図）

半夏雨防災食を食べてをり
祭髪たがひになほし神事待つ
シャツで拭く汗の眼鏡やビル現場
袖ぬらし金魚すくふ児順まつ児
外つ国へ明日は発つ子や梅ひらく

田之倉　稔

（天爲湘南）

里芋の親あり子あり孫もあり
山門の萩のお辞儀の古刹かな
秋茄子の二つを残し仕舞畑
身に入むや倒木奥の供養塔
秋風に少し揺れ居り鐘撞き棒

千葉民子

（季・たけのこ）

秋日燦相模の海は平らかに
父母に聞きたしあまた盆の月
終戦日少女でありし日の記憶
宰相の庭にふえゆく赤とんぼ
子の家に来てより見上ぐ銀河濃し

土川恵子

身のうちの自然のリズム花は葉に
知ることでやさしくなれり蝸牛
たのしみはつゆくさの青ひらく朝
蓮の花失せし香りを惜しみつつ
即位の日二羽の白鳥羽休め

手塚たま

（日航）

白寿して百寿自分史蝸牛
待ちわびる玄孫誕生立葵
しゃが咲いて手を引かれてや石名坂
秋うらら遠き思いを自分史に
年迎ふ花束貰ふ誕生日

手塚智之

（みちくさ）

バッサリと切られた芙蓉無念なり
伸びるだけ伸びて凌霄ぽとり落つ
今日もまた切なく咲くや百日紅
棺ごと戦艦大和沖縄忌
母子老いる緑穏やか石蕗の花

戸田恭子

（五月会）

古時計遅れを直す大晦日
薄れゆく夫の面影亀鳴けり
あの世へはうつらうつらと一人旅
片陰に路上絵描の髭男
父のことぽつりぽつりと衣被

富岡遊生

風鈴や昭和平成風となり
サーフィンや七里稲村由比ヶ浜
みんみん蝉採つて子供は寝小便
追ひかける逃げる金魚を金魚の目
秋の暮その波音に友と一献

富山　ゆたか

（波）

上がるときサーファー夕陽したたらす
プルタブを引く突堤といふ月見舟
引く波を大きく広げ秋夕焼
引く波の砂に消え入る秋夕焼
秋入日見送り静かなるコーダ

内藤　繁

（天爲湘南）

歩を早め秋の雲追ふ上人像
本堂の屋根の高さを鳥渡る
天保の青き燈籠喜雨の中
敵味方ともに供養や虫時雨
十三夜忍び泣きする照手姫

永井　かほる

（季の会）

柏餅母のこゑきく太柱
覚えなき壺の亀裂や春惜しむ
鳥の眼に射られ空しき実千両
穂芒や風のうねりに逆らへず
風呂吹を父にと夜を匂はする

中田　北斗

冬シャツの温もり残る脱衣かな
老人が老翁祝う敬老会
熱々の汁粉に浮かぶ夢いくつ
突き抜ける風にそよぐや芦の原
風光る山の端染めし日は落ちて

永塚亨司

（芙蓉句会）

城跡に栄枯偲べば梅香る
桜餅残る一つに二つの手
みんみんの鳴きて熱波の降りそそぐ
ボール蹴る子の後追ふや赤とんぼ
唇に紅差す少女檀の実

新島コノエ

（たけのこ・季）

かろやかに母の杼の音山笑ふ
この道は生家へ続く姫女苑
麦笛や御空の兄へとどけとどけ
母の日や供花に野の花一輪も
野菊咲く畦母の声姉のこゑ

西野洋司

こんこんと青き空あり冬の梅
ギブス捨てあっけらかんと春の風
畳まれし緋鯉を包む真鯉かな
たんぽぽの穂絮離るる昼の鐘
台風接近穴より蟻が蟻が蟻

萩原ふみを

（季）

長生きを己に誓ひ初鏡
麗かや画帳いつぱい富士を描く
泊り客なき民宿に白牡丹
傘どうし小声で噂梅雨の入
夕立の叩き隈なく大地の香

橋本信一

冬晴れや雲をまといぬ男体山
主(あるじ)なき家に花咲く今朝の春
藤の香の雨をまとえる帰り路
百合の白ゆれている母の一周忌
山の端に沿う雲の景秋高し

早田登

よりそうて終(つひ)の旅路や花筏
空蝉の固き己ぞ脱ぎすつる
手すさびや夏の夜市の弓くらべ
案山子殿しんがり守りとおせんぼ
真空のこがらしがふく心闇

原田稔

子ども園声を吸い込む春の空
胴炭を豪快に置く春衣
石段の数だけ祈る秋の寺
巡礼や阿波の関所の秋の雨
石川門鉄鋲荒く草紅葉

原山テイ子

うなだるる千のひまはり水を水を
聞き流す耳のありける良夜かな
相談にのってくれそういわし雲
遠花火外科病棟の高きに居
気がかりな雲のふえくるいぼむしり

藤田公雄

幼な日やキャサリン台風父奪ふ
入社式へ嵐爪痕名古屋駅
新社員狩野川台風の修理受く
小旅行阿武隈川に牛流る
出向す相模川畔の無事祈る

星野路生

（湘南若葉会）

田仕舞と見ゆるもの焚き秋深む
草紅葉して道祖神溺れたる
百舌鳥の声やや鋭くなりて秋深む
住み古りて門前店の柿たわわ
讃美歌の手話のやさしき初しぐれ

堀口みゆき

（鷹）

恋の句の詠み人知らず山眠る
淑気満つ松の色濃き美術館
遠雷や盲導犬の黒き艶
焼蕎麦は祭の匂ひ黄昏るる
黙祷の間も音たてて扇風機

見上都

（鷹）

空也忌のけむりのやうな雨の底
切り株の晒す年輪牧びらき
暁の春満月やくぬぎ山
盆梅や幼顔なる若女将
現し世に父来て母の団扇かな

宮城　美智子

（天爲湘南）

この胸は捨てし児のもの春の宵
揚羽蝶庭一面を揺り起す
秋の夜やふと母子手帳見たくなり
編み物も読書も飽きて時雨聴く
初富士や空の青さに溶けぬまま

宮田　敏子

喪が明けてしずかな日々や初つぼみ
空と土とまどい咲くや帰り花
白萩のこぼれて蟻の巣穴消ゆ
花万年青（おもと）元気をもらふ雨あがり
不可もなく可もなく師走今日卒寿

武藤　元子

月光よ墨子乞いたしきな臭い
熟柿食む天の滴を頂戴し
焼芋はほくほく頬っぺ頑張って
秋の蚊よ年を越してねふっと吹く
昇天はマスカット含みつ然（そ）うはかも

森田　順子

小春日の伊豆大島の軽く浮き
歩かねば見えぬものあり天高し
魚焼くにほひ小路の梅雨かな
白シヤツの吸ひ込まれゆく始発駅
すき間なくゆらぎ通しや雪柳

山下遊児

（波）

手庇で明日が見えるか梯子乗
春一番ペットボトルが逃げる逃げる
お祭だチョイ悪ぢぢの出番だぞ
コスモスや笑って終わる口喧嘩
燃えるだけ燃えてごらんよ冬紅葉

山田貴世

（波）

魔除け鈴一つ鳴らすも年用意
立春や星のかけらの貝拾う
水匂う八十八夜の幹の洞
くるぶしに青臭き香や螢狩
秋うらら港横浜カフェテラス

矢守登美子

（たけのこ）

足なへや逃げる二月に追ひつけず
江の島の空を領して夏の鳶
桃の皮つるりとむけてしたたれり
星合の叶はぬ想ひ笹に流し
うっすらと門灯灯り暮早し

吉田勝昌

（天爲湘南）

御来光見つめるめ目眼見な拝む
登りつめ見返す山の初桜
夏暁の一の倉見る山ガール
一の倉奥壁登りしめじ摘む
冬富士に歩荷で登る厳しい目

第一二十回市民俳句春の大会

とき　平成三十一年四月二十九日（月・祝）
ところ　藤沢市民会館　第一展示集会ホール
参加者　一二二名
講演　武井　協三氏（日本演劇研究者）
演題　「歌舞伎と身体障害」

成績記録

○特別賞　岩崎　照子
春耕や齢に楔打ちてより

○市長賞　増井　智子
長閑さや乳の数だけ子豚ゐて

○市議会議長賞　富山　ゆたか
覗かせてもらふスケッチ花の寺

○教育委員会賞　寺田　篤弘
フラミンゴ足入れかへる春の昼

○俳句協会長賞　加野　庸子
光得て風得て空のさくらかな

○協会賞（以下同）　由田　欣一
売られゆく牛に落花のひとしきり

徳江　祐子
春めくやふはりふはりと象の耳

新井　保
髪にくる花びら胸にくる花びら

上春　那美
平成を存分に生き花衣

富永　のりこ
垂直に河馬の口あく日永かな

佐藤　享子
若布干す遠流の島の一つ見ゆ

杉本　良月
糶市へ牛ひく声や朝ざくら

永井　かほる
里山の日を存分に土筆つむ

花の昼鋭角に行く櫂の音　山田節子

子や孫のわれは止まり木轉れり　坂本きみよ

春寒しまだ一塊の池の鯉　吉本史子

日当たりて笑ひ過ぎたる蕗の薹　藤沢紗智子

踏青や記憶をつなぐ数へ歌　朝広純子

待ち待ちて婚の桜湯ひらきけり　小松原キイ子

朝刊に余寒ものせて届けらる　笹川希伊子

若駒の首しならせて風を聴く　加野哲朗

常の日の続くやすらぎ葱坊主　静川美保子

鳴く牛の乳房張りたる暮春かな　畑昌子

遠野火や届く筈なき文を待つ　三間亮司

桜東風小鷺の冠羽もてあそぶ　鈴木三枝子

短波ラジオの針定まらぬ余寒かな　鈴木千枝子

花に人に酔ひて暮るるや吉野山　木村俊子

姉癒えよ癒えて桜花の下に立て　大場ヤエ

ふきみそや弟ぽつり母のこと　千葉民子

四十四回一遍上人忌俳句大会

とき　令和元年九月十六日（月・祝）
ところ　時宗総本山・藤沢山清浄光寺（遊行寺）
　大書院
講演　長嶺千晶氏
演題　「俳句における志向性
　――虚子と草田男の分岐点をさぐる」
参加者　当日　八十八名　応募句　一二八名

応募句成績

○遊行寺賞　寺田篤弘
故郷に降りてそのまま踊りの輪

○青木賞　増井智子
抱へ来る牛の飼葉や今朝の秋

○北澤賞　鈴木絹子
初秋や手のひらほどの詩集買う

○市長賞　上川謙一
空へ水打ちたるごとき帰燕かな

○協会長賞　三間亮司
ふるさとの訛に戻る盆の客

○協会賞（以下同）　鏡みさを
石工の音のいちにち寺の秋

佐藤享子
送り火の跡を残して掃かれけり

朝広純子
雁渡る父なる山の晴れやかに

伊藤真理子
日裏には日裏の草や秋の声

長野保代
残照に力みちゆく鶏頭花

鈴木浩子
歳月に痩せし階花芙蓉

由田欣一
語尾ながき伊予の人たち一遍忌

ゆつくりと墨を摩る夜や涼新　岩谷明子

母の呼ぶこゑを遠くに夕簾　加藤完司

存へし人それぞれの終戦日　深津健司

ちちろ鳴く只中にゐて一遍忌　河本朋広

一遍忌歩めば月が付いてくる　尾崎竹詩

遊行寺へ一歩一歩の露けしや　加藤いろは

この池のこの杭が好き鬼やんま　長澤義雄

大き樹に大き影あり一遍忌　髙橋きよ子

遊行忌の風にのりくる大太鼓　吉川美知子

秋ほたる人ゐて人のなほ恋し　山下遊児

落暉いま余光となりて鳥渡る　渡辺美宏

当日句成績

○遊行寺賞

熊笹に風の噛みあと夕野分　川路ゆさ

○青木賞

野分中合掌解かぬ一遍像　寺田篤弘

○北澤賞

合掌は野分へ向けて一遍像　鹿野島孝二

○市長賞

覗き見る甕の中より秋の声　山田貴世

○協会長賞

青空の切れ端を曳き野分過ぐ　中根美保

○協会賞（以下同）

黒門の剥落著き野分あと　鈴木三枝子

身に沁むや大本堂に燈一つ　原口海人

和蠟燭匂へる闇や野分来る　朝広純子

ぶつかつてまたぶつかつて秋の蟬　菊川敏朗

真つ先に犬の駈け出す野分あと　髙瀬俊次

黒門の黒を深めて秋の雨　山下遊児

天も地も紫に暮れ野分あと　村上和子

開け放つ寺の座敷や野分あと　鏡渕操

ひと雨に瑠璃の濃くなる蛍草　松坂真理子

秋寂ぶや黒門統べる深き黙　山田節子

野分来と屋根に鴉の威し声　常盤貴美子

くつきりと富士も箱根も野分晴　青木敏行

野分過ぎ人のまなざし静かなる　末永朱胤

したたかに降る雨遊行の忌なりけり　原山テイ子

水音も佛の声や野分晴　佐藤享子

一遍の空のさざ波鳥渡る　大平雅芳

嘶きに空晴れわたる野分あと　岩崎照子

判官の名馬の墓や小鳥来る　前田恵美

第一二一回市民俳句秋の大会

とき　令和元年十月十四日（月・祝）
ところ　藤沢市民会館　第一展示集会ホール
参加者　一〇九名
講　演　井上泰至氏（防衛大学教授　文学博士）
演　題　「俳句雑誌と洋画・日本画」

成績記録

○市長賞　中村　みきこ
方言の濁音優し茸汁

○市議会議長賞　山下　遊児
新藁を藁もてくくる指太し

○教育委員会賞　坂本　きみよ
霧ごめや低く呼び交う牧の牛

○俳句協会長賞　松坂　真理子
八月の寡黙貫き父逝けり

○協会賞（以下同）　前田　恵美
子規の忌の飯のくぼみに割る卵

増井　智子
掌をはみだし揺るる新豆腐

中根　美保
木の瘤が足場の一つ秋気澄む

岩崎　照子
高秋や鍬一丁にある余生

神谷　章夫
水たまりざぶざぶ踏んで里祭

渡辺　美宏
新涼や高き帽子の料理長

篠原　広子
やはらかく結ぶ風呂敷柿の秋

渡部　喬
台風の吹き残したる孤独かな

鈴木　三枝子
浅間嶺に淡き噴煙走り蕎麦

突堤のトランペットや天高し　杉村良月

恙無くひととせ過ぐる今年藁　吉本史子

巫女舞の鈴八方に月今宵　佐藤享子

二人とは安堵の数や遠花火　草柳得江

秋思とはフラット気味のヴァイオリン　上春那美

爆音は雲間に消えて赤とんぼ　大矢暁美

ユトリロの白き坂より秋の風　亀倉美知子

神鈴をいくども鳴らし野分去る　川路ゆさ

流鏑馬の神事待つ馬秋高し　今井美恵子

水引や今日より変わる風の色　鈴木絹子

秋晴や土手の自転車空へ翔ぶ　酒向昭

木村屋のあんぱん買うて秋彼岸　富山ゆたか

パン種の発酵しきり星月夜　寺田篤弘

一揺れがうねりとなれり芒原　前田弘子

秋日傘たたむや大き柏槙に　堀口みゆき

鉛筆の削り香強き秋の夜　福田善吉

一年を渓とし鮎の落ちにけり　小宮山はるき